

芸術（美術・工芸）

1 研究テーマ

(1) 研究テーマ

「指導と評価の一体化」の実現に向けた学習評価の充実
～育成したい造形的な視点と使用する言葉の関係～

(2) 研究のねらい

主体的・対話的で深い学びの視点による学習過程の工夫改善及び、適切な評価の実践に関する先行研究を基に、生徒の学習過程、教師の指導に生かす評価の充実を目指し、生徒が題材を通して造形的な見方・考え方を働かせ主体的に学ぶ姿勢を育成するために、題材指導における「言葉」の活用を研究の中心的な手立てとした。

2 実践事例

(1) 題材の指導と評価の計画

ア 科目名：「美術 I」（1 学年）

イ 題材名：写真表現 日常風景を、私はこう切り取る

ウ 題材の目標：

【知識及び技能】

- ・形や色彩、材料、光などの性質及びそれらが感情にもたらす効果、造形的な特徴などを基に、全体のイメージや作風などで捉えることを理解する。（〔共通事項〕）
- ・意図に応じてカメラの特性を生かすとともに、表現方法を創意工夫し、主題を追求して、表現の意図を効果的に表す。（「A 表現」（3）イ）

【思考力、判断力、表現力等】

- ・感じ取ったことや考えたことなどを基に、写真表現の特性を生かして主題を生成する。また、被写体の印象や瞬間の美しさなどを基に、構図や光、シャッタースピードによる変化などの写真表現の視覚的な要素の働きについて考え、創造的な表現の構想を練る。（「A 表現」（3）ア）
- ・写真表現の特性や表現効果などを感じ取り、作者の心情や意図と創造的な表現の工夫などについて考え、見方や感じ方を深める。（「B 鑑賞」（1）ア（ウ））

【学びに向かう力、人間性等】

- ・写真表現の特性を生かして感じ取ったことや考えたことなどを基にした表現の創造活動に、主体的に取り組もうとする。
- ・写真表現の特性や表現効果などを感じ取り、作者の心情や意図と創造的な表現の工夫などについて考え、見方や感じ方を深める鑑賞の創造活動に、主体的に取り組もうとする。

エ 題材の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
<p>知 構図、写す角度や配置、拡大や縮小、光や影、時間の静止などの効果、造形的な特徴などを基に、全体のイメージや作風、様式などで捉えることを理解している。</p> <p>技 意図に応じてカメラの特性を生かし、表現方法を創意工夫し、主題を追求して表現の意図を効果的に表している。</p>	<p>発 感じ取ったことや考えたことなどを基に、写真表現の特性を生かして主題を生成し、構図や光、シャッタースピードなどの写真表現の働きについて考え、創造的な表現の構想を練っている。</p> <p>鑑 写真表現の特質や表現効果などを感じ取り、作者の心情や意図と創造的な表現の工夫などについて</p>	<p>態表 主体的に写真表現の特性を生かして感じ取ったことや考えたことを基にした表現の創造活動に、取り組もうとしている。</p> <p>態鑑 主体的に写真表現の特性や表現効果、造形的なよさや美しさなどを感じ取り、作者の心情と創造的な表現の工夫などについて考え、見方や感じ方を深める鑑賞の</p>

	考え、見方や感じ方を深めている。 る。	創造活動に、取り組もうとしている。 る。
--	------------------------	-------------------------

オ 題材の指導と評価の計画 □…「記録に残す評価」 ■…「指導に生かす評価」

次	時	学習活動	知 ・ 技	思 考	態 度	評価のポイント・指導上のポイント
1	1 本 時	導入(1時間) 表現形式について <ul style="list-style-type: none"> 写真の歴史と表現について考える。 ワーク①写真についての造形的な見方や考え方を働かせるために、カメラオブスクラを使用し、15世紀の画家の技術の追体験や写真表現の工夫について考える。 今までの経験などから、感じたことや考えたことを、グループで共有する。 作品の鑑賞 <ul style="list-style-type: none"> 写真作品についての造形的な見方・考え方を深めるために図版を鑑賞したり、ワーク②構図の外側を想像させる活動を行ったりする。 	知 ↓	鑑 ↓	態 ↓	活動の様子、発言の内容、ワーク①②(図2・3) 【指導上のポイント】 写真作品の特徴や美しさを感じ取り、どのように発想や構図の独自性と表現の工夫をしているのかなどについて、多様な視点で考えられるよう工夫する。 <ul style="list-style-type: none"> ワーク①②写真作品を全体のイメージや作風などで捉え、それを基に、写真やカメラの仕組みや歴史などについて、グループで意見共有を行い、対話を通して考えを広げるよう工夫する。 構図の重要性、光と影の効果、シャッタースピードによる見え方や心象の違いなどに着目させ、特徴や効果を理解し見方考え方を深められるよう指導する。 ワーク②構図の外側を想像させる活動を通して、主題や意図と表現の工夫などを感じ取らせる。 【鑑 態鑑の評価のポイント】 生徒が主体的に見方・感じ方を深めようとする意欲や態度を高められるように、発問や作品や資料の提示の順番など鑑賞活動の内容を工夫し、その姿を活動の様子や発言の内容から見取る。
2	2	発想や構想・制作(1時間) <ul style="list-style-type: none"> 生徒はくじ引きで各自の作品のキーワード(境界・調和・違和感・隙間・記憶)を決定し、それを基に、発想や構想したことを創造的に表す。 ISO感度やシャッターについて理解する。撮影した写真の彩度やコントラストなどを意図に応じて調整し、主題を追求して作品を完成させる。 	知 ↓	発 ↓	態 ↓	活動の様子、途中作品、作品 【指導上のポイント】 <ul style="list-style-type: none"> 与えられたキーワードを基に、主題を表現するために、構図やシャッターなどを工夫し、試行錯誤をすることを意識させる。 写真の特性を生かし、彩度やコントラストなどを意図に応じて調整するよう丁寧に説明する。 【技の評価のポイント】 作品制作での技術の有無ではなく、写真が持つ機能や特性、与えられたキーワードを踏まえ、主題にあった表現をすることを理解し、意図に応じて写真の特徴をいかし、表現方法を工夫し、主題を追求しながら個性豊かに創造的に表現しているか、活動の様子から見取る。 【発の評価のポイント】 <ul style="list-style-type: none"> 与えられたキーワードから写真が持つ機能や特性などを生かして主題を生成し、写真表現の視覚的な要素の働きを基に創造的な表現の構想を練っているかを、活動の様子や作品から評価する。 【態表の評価のポイント】 生成した主題を表現するために、主体的に繰り返し構図を考えたり、写真表現の特性を生かして彩度やコントラストを調整したりするなどの姿を途中作品、作品、ワークシートから見取り、評価する。

3	3	鑑賞・発想や構想 (1時間) <ul style="list-style-type: none"> 制作体験や作品のキーワードを基にして、作品の共通点や相違点について考える。 印刷された写真作品を相互鑑賞し、グループディスカッションを行う。 必要に応じて作品の構図の精査や調整などを行い、最終調整を行う。 	知 ↓	発 ↓	態 ↓	活動の様子、作品、途中作品、ワークシート 【指導上のポイント】 円滑な話し合いができるよう、ツール①(図5)を用いる。自身の作品について説明することで、主題を明確にしたり、造形的な視点を働かせて現したりすることを意識させるよう工夫する。 【態鑑の評価のポイント】 生徒が主体的に制作に取り組み、造形的な要素を意識しながらより良い表現を目指して試行錯誤している姿や、発想や構想の独自性、表現の工夫などについて、多様な視点で他の人と批評し合っている姿を活動の様子やワークシートから見取る。
4	4	鑑賞(1時間) <ul style="list-style-type: none"> 完成したお互いの作品を鑑賞し、感じたことや考えたことなどから根拠を持って批評し合い、見方や感じ方を深める。 生徒同士が作品を鑑賞し、作者の心情や意図と創造的な表現の工夫などについて、表現の学習活動で学んだことを関連させて考え、見方や感じ方を深める。 振り返りをする 	知 ↓	鑑 ↓	態 ↓	活動の様子、振り返り(表2～4) 【指導上のポイント】 題材を通して造形的な見方・考え方を働かせ、他者の作品からだけでなく、広告などの身近な写真のよさや美しさから見方や感じ方を深められたか、思考の流れを実感できるような鑑賞の活動を行う。 【指導上のポイント】 題材全体の振り返りでは、生徒が表現と鑑賞の学習活動の関連に気付き、自己の学びの蓄積を把握し、写真表現の本質に迫れるよう、発問を工夫する。 【態鑑の評価のポイント】 前時の態鑑の評価のポイントと同じ。
		授業外：題材の終了後	知 技	発 鑑	態 鑑	完成作品(図6・7等)、活動の様子記録 【技の評価のポイント】 完成作品とともにワーク等の活動の様子及びワークシートから創造的に表す技術の変容、高まりを見取る。 【知の評価のポイント】 本題材では、与えられたキーワードを基に造形的な視点を働かせ、主題を生成することから、完成作品及び振り返りから実現状況を見取って評価する。 【発の評価のポイント】 与えられたキーワードや造形的な要素の働きについて考えが深まり、主題や表現の意図など発想や構想が変化していく過程や高まりをワークシート及び振り返り、作品から読み取り評価する。 【鑑 態鑑の評価のポイント】 生徒自身が主体的に写真表現の経験を生かしながら他者の作品を鑑賞し、表現の創造活動で学んだことを関連させて考え、見方や感じ方を深めているかどうかを振り返り、ワークシート及び作品から見取る。

知＝「知識・技能」の知識に関する評価規準
技＝「知識・技能」の技能に関する評価規準
発＝「思考・判断・表現」の発想や構想に関する評価規準

鑑＝「思考・判断・表現」の鑑賞に関する評価規準
態表＝表現における「主体的に学習に取り組む態度」に関する評価規準
態鑑＝鑑賞における「主体的に学習に取り組む態度」に関する評価規準

研究実施校：神奈川県立湘南高等学校(全日制)
 実施日：令和7年10月22日(水)
 授業担当者：上田 啓太 教諭

カ 授業実践例(1時間目/4時間)

学習活動(指導上の留意点を含む)	評価の観点(評価方法)
導入 (5分) 本時の学習の流れとねらいをスライドから確認する。	
展開1 (10分) ワーク①写真やカメラの歴史について理解する。 ・スライド資料等により写真やカメラの歴史について理解する。	
展開2 (10分) ワーク①「カメラオブスクラを使用した制作体験」(図2) ・フェルメールが絵を描く際に行っていた方法を追体験する。二人一組でカメラオブスクラが映し出す映像をなぞりながら一人2分程度で友人の顔を描く。カメラの仕組みを実感的に理解・鑑賞する。 ・クラスで数名、共有した意見について全体発表をする。 [指導上の留意点] 全体の意見を集約し、造形的な視点を働かせることが重要であることをクラス全体で確認する。	【知識・技能】 【鑑思考・判断・表現】 ・作品(ワーク①) 【態鑑鑑賞における主体的に学習に取り組む態度】 ・活動の様子
展開3 (20分) 写真の作品鑑賞を行う。[指導上の留意点] 写真についての造形的な見方・考え方を深められるよう指導する。 ・単に仏像の全体を映した図録的な写真と土門拳の「室生寺弥勒堂釈迦如来坐像左半面相」のように構図に工夫の見られる作品の比較、他にもアンドレアスグルスキー等の構図の比較を行い、造形的な見方・考え方を鑑賞の際に意識できるようにする。	
展開4 (20分) ワーク②「写真の外側を想像する」(図3) ・プリント中央に印刷された写真の外側を、想像力を働かせながら描き、作者がどのような意図でその構図を選んだのかを考える。	【知識・技能】 【鑑思考・判断・表現】 ・作品(ワーク②) 【態鑑鑑賞における主体的に学習に取り組む態度】
まとめ・振り返り(5分) 今後の制作へ反映できるようにグループやクラス全体で共有した内容を振り返る。	【態表表現における主体的に学習に取り組む態度】 【発思考・判断・表現】
次時について 授業でグループ活動や全体発表で共有した意見を基に自身の主題を再検討するとともに、次回、くじ引きで決定する作品のキーワード(境界・調和・違和感・隙間・記憶)をどのように調和させていくか構想を練る。 ISO感度やシャッターについて理解するとともに、撮影した写真の彩度やコントラストなどを意図に応じて調整し、主題を追求して表現の構想を練り、作品を完成させる。	

(2) 「指導と評価の一体化」の実現に向けたポイント

題材指導の中で生徒に定着させたい造形的な見方・考え方、または造形的な視点を明確にし、導入、制作、作品鑑賞、参考資料の選定、振り返り、評価といった各学習場面に応じて最適な言葉を選定し、意図的に使用することとした。

これにより、学習活動全体を通して一貫した造形的な見方・考え方、造形的な視点を生徒と共有することが可能となり、題材のねらいと評価規準の対応関係が明確になると考えた。このことは、「指導と評価の一体化」を図る上で有効であると捉えた。

ア 「題材と使用語彙の関係」について教員対象アンケート

このアンケートは、「題材と使用語彙の関係」について各校での取組や、これまでの指導での考えを調査することを目的に、神奈川県高等学校教科研究会 美術、工芸部会が、県立高等学校・中等教育学校の芸術科(美術・工芸)担当教員34名を対象に行ったものである。アンケート内容は、【どれくらい「言葉」を意識的か、どのような手法を使っているか】を問うもので、回答の中の90%以上が言葉について意識しているという結果であった。この結果を受けて推進委員会では、「授業内でどのような言葉をどの場面で用いるか」を共有できるようにするために「造形的な要素に注目させる「言葉」を考える授業構想シート」を作成した。

イ 造形的な視点を共有するために使用する言葉の理解

造形的な見方・考え方とは「美術の特質に応じた物事を捉える視点や考え方として、表現及び鑑賞の活動を通して、感性や美意識、想像力を働かせ、対象や事象を造形的な視点で捉え、自分としての意味や価値をつくりだすこと」(『高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 芸術(音楽 美術 工芸 書道)編 音楽編 美術編』(以下、『解説』という)p.101)である。

造形的な要素に注目させる「言葉」を考える授業構想シート		目指す生徒像:題材ごとに基礎的な知識・技術を身に付け、そこから自身の表現を追求し、深く自己を見つめて豊かな個性を育み、優れた社会の形成者となる。			
		※作品鑑賞に関しては制作前・中間・後と適宜列を増やして下さい。 ※適宜行も増やして下さい。			
場面要素を伝える言葉		導入・説明	制作	鑑賞	振り返り
				作品鑑賞 制作(前・中間・後)	相互鑑賞 制作(前・中間・後)
①構図	構図の種類・名前	撮影時の姿勢 被写体との距離	何を撮りたかったか 何を撮らなかったか 構図の「外側」	良い構図とは 構図で表現できること	良い構図とは 構図で表現できること
②時間の表現	シャッタースピード	写真に流したい時間	写真から読み取れる時間的な要素(時代、時期、時間帯、季節、一瞬、長時間、永遠など)	写真で表現できる時間	写真で表現できる時間
③光	露出 コントラスト 彩度	自分にしかわからないレベルで 微調整する	左の要素の違いで、得られる印象の違いを言葉にする。 「彩度が高いと○○な写真になる」など。(彩度が高い写真をささいだと感じる人もいれば、下品だと感じる人もいます。)	雰囲気、空気感、味わい	雰囲気、空気感、味わい
生徒が働かせる主な視点	一般論・題材に関する知識 (制作方法・作家の言葉等)	制作者としての見方	作家の意図 鑑賞者としての見方	制作者・鑑賞者としての見方	総合的な見方

図1 造形的な要素に注目させる「言葉」を考える授業構想シート(本題材の記入例)

図1及び本題材の記入例は総合教育センターウェブページにてダウンロードできます。

造形的な視点とは、「造形を豊かに捉える多様な視点であり、形や色彩、材料や光などの造形の要素に着目してそれらの働きを捉えたり、全体に着目して造形的な特徴などからイメージを捉えたりする視点のこと」(『解説』p.102)である。この造形的な視点を生徒が持っていないと、身の回りにある色彩や材料、光などの働きや美しさに気付かず、通り過ぎてしまう。造形的な視点を持つことができると漠然と見ているだけでは気付かなかった身近な生活の中にあるよさや美しさを感じ取ることができるようになり、感性が十分育っていく。また、美術の「知識」の評価は、単に暗記することに終始するような知識ではない。表現や鑑賞の学習で、学んだ知識を生かして、形や色彩、材料や光などの造形の要素に着目してそれらの働きを捉えたり、作品の全体に着目して造形的な特徴などからイメージを捉えたりできるようになるということである。美術の学習の中で、生きて働く知識として実感的に理解した実現状況を評価することが求められる。

本研究では、「言葉」を通して、題材の目標やねらいと活動のポイントを、生徒と教師が共有しやすくするための工夫を研究しているが、前述のとおり、単に言葉の暗記に偏ることを避け、様々な作品や活動を通して造形的な要素と言葉がつながり、それらを実感的に学び取っていくよう展開を工夫している。授業のどの場面でどのような造形的な要素、またそれを表す言葉に注目させるかを計画し(図1)、題材の写真を漠然と捉えるのではなく、「構図」「時間」「光」という三つの要素に分解した。これらの言葉に関する造形的な要素を、実感を伴いながら理解し、使えるようになることで、生徒が写真を制作・鑑賞する造形的な視点や造形的な見方・考え方を深めることをねらいとした。「言葉」を適切に理解しているか、教師がワークシートや生徒の作品、振り返りから見取っていく。写真作品の見方や良し悪しの基準を自分なりに言語化したり、作品の表現意図を考えたりするうえで適切な言葉を使用できることは、美術の造形的な見方・考え方の核である「自分としての意味や価値をつくりだすこと」(『解説』p.102)を深めるうえで重要になる。



図2 カメラオブスクラを用いた制作の様子



図3 写真の外側を想像するグループワークの様子

ウ 授業実践の工夫

(7) 1次 導入

題材の指導と評価の計画の1次1時のワーク①の活動としてスライド資料等により写真やカメラの歴史について理解を深めた。その後、グループに分かれてカメラオブスクラを用いた制作体験を行った(図2)。カメラの構造の他にもピントや光という造形的な要素について体験を通して実感的に学び取ることが出来ていた。また、写真の役割の違いから来る構図の比較や、独自性の強い構図で撮影された作品の紹介などを行い、造形的な視点、造形的な見方・考え方に繋がる鑑賞を行った。その後、題材の指導と評価の計画の1次1時のワーク②の活動として、グループごとに割り振られた写真の外側を想像するグループワークを行った(図3)。模造紙中央に印刷された写真を貼り、写真の外側に想像力を働かせながら描き、作者がどのような意図でその構図を選んだのか考えさせた。その際使用したワークシート(図4)には、造形的な要素を言葉別に細分化し、作品から感じ取ったものがどのような造形的な視点に対する言葉なのか、記入することで身に付く工夫している。生徒は、担当の作品の構図について「アサヨミ」(ただ見えたものや事実をそのまま書く)を記入する。そして構図の外側を想像する活動をした後、「フカヨミ」(各要素にどのような意図があるのかを書く)を記入し、作品についてグループの考えをまとめ、発表し、他グループは印象に残った

構図について考える		1年 組 番 氏名 _____	
担当する写真:			
何を撮った?			
第一印象			
まず写真の構図について「アサヨミ」をする。ただ見えたものや事実をそのまま書くだけでよい。次に「構図の外側」を想像し、各要素にどのような意図があるのかを「フカヨミ」する。			
	アサヨミ	フカヨミ	
フレーミング			
アクセント 視線誘導			
バランス			
遠近 奥行き			
視点 アングル			

図4 ワーク②ワークシート

図4は総合教育センターウェブページにてダウンロードできます。

たことを記入する展開にしている。グループでの活動や全体発表を聞くことで、自分に無い発想や視点で新たに作品を鑑賞することができ、造形的な視点での捉え、造形的な見方・考え方がより一層進むと考えられる。

(イ) 2次 導入・展開

生徒はくじ引きで各自のキーワード(境界・調和・違和感・隙間・記憶)を決める。キーワードを基に発想や構想し、主題を生成し、表現(撮影や調整)を行う。その際、ISO感度やシャッター、コントラストや彩度といった造形的な要素を含む撮影や調整が必要となる用語を伝え、生徒が意図に応じてカメラの特性を生かし、効果的に表し、工夫できるようにする。撮影時は、異なるキーワードの者同士が一緒に行動しアドバイスをし合った。キーワードの解釈に他者の視点も取り入れることで、よりねらいに近づくヒントとした。生徒は、様々な機能を試行錯誤しキーワードを追求した表現活動を行い、作品を完成させた。

(ウ) 3次 導入・展開

撮影後は、印刷された各自の作品を相互鑑賞し、グループごとに協議を行った。協議の際は、「カメレギロン」というグループにおける話し合い活動を助けるカードゲーム風教材(図5)を用いた。カメレギロンは、各カードに「司会者」「提案者」「異論者」など七つの役割が書かれており、自分の役割に沿った立場で協議に参加し、ターンが一周したらカードを引き直すというルールになっている。役割分担を決めると、生徒はその役割として作品を鑑賞するため、新たな視点で作品に向き合う経験が得られる。また、役割になりきって話し合いが進められるため、活発な協議を行うことができる。

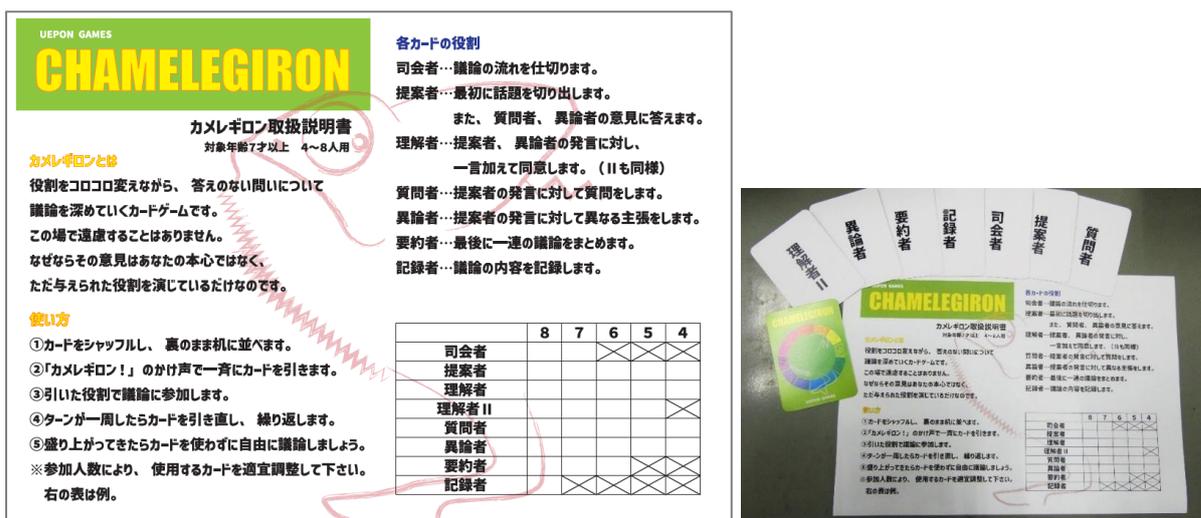


図5 カメレギロン

図5は総合教育センターウェブページにてダウンロードできます。

(エ) 3次 提出物

生徒の協議メモから、露出や彩度、時間や光といった要素が写真表現にどのような働きをもたらすかということを感じ取り、それらの造形的な要素に関連した自分の見方や感じ方を言語化している様子が見て取れる(表1)。

表1 生徒の協議メモの記載(一部抜粋、下線は筆者)

写真で表現できる「時間」	露出や彩度など調整と「雰囲気」「空気感」「味」などの関係
天気や明るさ、どんな色のものがあるか →いつの何時代のものか分かる。 時間×光 日時計があるくらいだし、 <u>光と時間</u> は密接！！ → <u>シャッター</u> で光をコントロール&時間をコントロール	光、鮮やかさを変えると全体の色味が大きく変わって受ける印象も異なる。 <u>撮った人の印象</u> みたいなものはよく伝わる→でも、彩度、露出を表現するには限界がある

エ 成果

振り返りでは造形的な要素の内、各「言葉」についてどのように意識したかを質問した。その記載(表3)や作品(図6・7)からは、生徒が自身の表現においてカメラの機能や調整を工夫し、主題を生成し、造形的な視点を働かせ、自らの視点で作品を制作した様子が伺える(表2、図6・7)。

表2 振り返りの設問

設問①	自分が撮影した写真のテーマに対し、「構図」「時間」「光」という要素をどのように関連づけて表現したかをまとめる。
質問②	写真表現において「良い構図」とはどんなものか、これまでの活動を踏まえてまとめる。
質問③	写真作品の時間的な要素や写真全体が持つ雰囲気や空気感、味わいについて、課題全体を通して考えたことや感じた事をまとめる。

キーワード「調和」	
	<p>設問① 調和というテーマだったため、紙束を中心に上下左右が対象になるように写真を撮った。偶然ではあったが、光も含めて左右対称になったため、中心に視線を誘導する良い構図になったと思う。時間:全体の色合いを青で統一することで、朝のような雰囲気にした。光:紙束とロッカーの一部に注目して欲しかったため、そこに光が当たっていることを強調するような加工を行った。</p>
	<p>設問② 「良い構図」とは、自分が見せたいものを、最大限魅力的に見せられる構図のことだと思う。この写真は一度、ロッカーを斜め上から撮る構図にしたが中央の紙束が目立たず、色々な撮り方をしてみたところ、1番しっくりきたのが今の構図だった。構図を変えることで、目立つ部分が変わり、違う印象を与えるということが分かった。</p>
	<p>設問③ 時間、雰囲気、空気感、味わいを自分のイメージを表現するうえで、色味に頼りがちなように感じた。色味での表現は簡単で伝わりやすいが、表現の幅が狭く面白くないような気がする。構図や明るさといった、色味以外の要素も使いこなせるようにしたい。</p>

図6 生徒㉞の作品及び振り返りの回答(一部抜粋、下線は筆者)

キーワード「記憶」	
	<p>設問① ・テーマである記憶から連想し、思い出についての写真を撮った。思い出は鮮明なものではなく、どこかぼやけていて曖昧なものだと思ったので、写真を全体的にぼやかして彩度を落として記憶の中の風景を再現した。 構図は見せたい窓の中が真ん中に来るようにした。 また、思い出は(記憶)は全てを覚えているのではなく、断片的なある一部分だけのものであると考えたから、ドアの窓から中を覗く構図にすることでその考えを伝えようとした。 自分の感覚として、日常の良い思い出は日が暖かく差し込んでいるイメージがあるから暖かみを意識して色の調節をした。これによって夕方のような雰囲気になった。</p>
	<p>設問② 良い構図に共通してあると思ったのは、見る人の想像を掻き立てるような構図。例えば連続しているものや想像がつく形のを写真の中に全て入れないことで見る人の想像上で完成するから深みが出る作品になると思った。他にも目立たせたいものを配置する、中心に向かって集まっていく形など秩序がある方が見やすくていい構図になると思った。</p>
	<p>設問③ 写真は一瞬しか捉えられないけれど、時間の流れと共に変化してきたものを取ることでその物から時間の流れを感じることができる。また、光の雰囲気によって時間帯を写真の中から読み取ることができると思う。写真は色味や明るさを調節できるから現実にはない雰囲気を作れたり、写真に写っているもののよさを更に引き出したりすることができる。また調節によっても季節感や時間帯を表すことができると思った。</p>

図7 生徒㉟の作品及び振り返りの回答(一部抜粋、下線は筆者)

表3 表2 振り返り 設問①に対する他の生徒の記載の一部抜粋

設問①の生徒の記載	
構図	<ul style="list-style-type: none"> ・テーマの強調のために、被写体をあえて中央に配置したり、一点透視図法や遠近法を用いて奥行きを出したりする手法が多く用いられている。 ・下から見上げるアングル(ローアングル)を採用し、被写体(建物、木など)の強調や、壮かさ、記憶の遡行といったテーマ表現に結びつけた。 ・画面の一部を切り取ることで、想像の余地を残したり、校舎の窓枠や角など日常的な要素の対比を表現したりする試みも見られる。
光	<ul style="list-style-type: none"> ・光の強さ、色温度、コントラストを操作し、写真の雰囲気(空気感)や時間をコントロールした。 ・「光が差し込む瞬間」や「光のコントラスト」そのものをテーマの中心に据え、一瞬の時間や強いメッセージ性を表現している。 ・特に注目してほしい場所に光を当てることで、鑑賞者の視線を誘導する役割も担わせている。
時間	<ul style="list-style-type: none"> ・単にシャッターの時間による変化だけでなく、色合いのコントロールによって「静寂な時間」「過去の記憶」といった抽象的な時間を表現している。 ・季節の要素(紅葉など)や時間帯(昼、夕暮れなど)で、具体的な時間的な流れや変化を感じさせている。

表3は、今回の題材の生徒の振り返り73名分の問①の記載の抜粋である。これを見ても、構図の工夫や光の調整をすることで、自分の表現したい感情や時間を創意工夫したという記述が見られる。また、表4は同振り返りに生徒が使用した造形的な要素を伝える意図のあると思われる言葉の回数である。これを見ても、他の多くの生徒も、表3の生徒のように造形の要素に関する言葉を意識して振り返りの際に使用していたことが分かる。表3と同様に、振り返り全体を通して、写真という媒体が持つ、「一瞬を留める」「光を捉える」「非日常的な視点で切り取る」といった記載が多く見られ、作品を表現する際に、単なる表面的なテクニックとしてではなく、自らの主題を生成するための具体的な方法として実感的に使いこなそうとしていたことが見て取れる。

表3の構図や光の記載や、設問②の「良い構図」に関する生徒回答では、多くの生徒が作品を鑑賞する際にも、「作者の意図が伝わるか」という視点を持っていた。その一方で、鑑賞者自身の解釈や想像の余地を意図的に残すことで、作品の奥行きを深めようとしている意図を感じ取ることができるという記載も多くみられた。そして、「被写体だけでなく、周囲の物体や背景、光と影の要素も利用してテーマを引き立てる。明暗差による視線誘導を有効な手段」などを挙げている生徒もいた。単に全体像を捉えるのではなく、一部を切り取ることで鑑賞者に背景や心情を想像させる、色々な考えが生まれてくるような余地を残す構図が良いという考えがみられた。

表4 振り返りにおける使用した言葉の回数(下線は今回題材で強調して扱った言葉)

要素を伝える言葉 ()内はその使用回数	関連する言葉	関連する言葉の使用回数計
構図(259)	フレーミング・フレーム5、アクセント7、左右対称16、シンメトリー7、視線誘導11、バランス12、中心23、 <u>配置15</u> 、 <u>余白4</u> 、 <u>アングル1</u> 、 <u>構成2</u> 、 <u>画角6</u>	109
時間(163)	瞬間17、一瞬22、ゆっくり6、永遠1、シャッタースピード11、経験4、経過8、朝5、昼19、夕10、夜5、時代5、 <u>時期・季節8</u> 、 <u>永遠1</u>	122
光・影・陰(314)	明暗9、 <u>明度2</u> 、明75、暗58、 <u>露出6</u> 、 <u>コントラスト20</u> 、 <u>ハイライト・シャドウ4</u> 、 <u>レベル3</u>	177
色(131)	<u>彩度22</u> 、 <u>暖色6</u> 、 <u>寒色5</u> 、 <u>色相1</u> 、 <u>補色2</u> 、 <u>色温度1</u> 、 <u>鮮やか3</u>	40
主題・テーマ・思考・考察・考え・意図・伝える (56・99・106)	工夫39、想像43、解釈7、主観3、イメージ25、 <u>視点18</u>	135
その他の造形的な要素(感情16)	感動2、心情1、気持ち10、寂しい悲しい哀しい8、楽しい嬉しい14、優しい3、懐かしい7、静か18、 <u>強調26</u> 、 <u>冷たい4</u> 、 <u>暖かい6</u>	99
その他の造形的な要素	空気感26、 <u>雰囲気80</u> 、 <u>対比25</u> 、 <u>動き22</u> 、 <u>テキスト2</u> 、 <u>形15</u> 、 <u>立体感3</u> 、 <u>遠近14</u> 、 <u>奥行き14</u> 、 <u>空間21</u>	222

また、表3、設問③の回答からも、多くの生徒が授業を通して、動画のような時間変化が直接なくとも、静的なものや一瞬の切り取りからも時間的な要素を感じ取れるようになったことが分かった。また、何を切り取るかという構図の選択によって画面に映っていない背景やストーリーを想像でき、作品の雰囲気や空気感をより深く楽しめるという認識も共有されていた。多く生徒が、写真は、「光の加減を詳細に写し取ること」や「目で見る時にはない視点で表現できる」ことが魅力と感じていた。

今回の成果につながった要因は、言葉を教師と生徒で共有し、見取る場面を意識的に取り入れたこと

であると考えられる。当初、写真という題材は、シャッターを押せば完成の形を成してしまうという特性上、制作部分での造形的な要素の理解や深まりが、作品や思考に反映しにくいことも想定された。しかし、生徒それぞれが自分の考えを深めることが出来ており、「指導と評価の一体化」を実現するために言葉の活用が効果的に機能することを示す結果となった。特に注目すべきは、多くの生徒が良い構図の条件として、「作者の意図を伝えること」や「見る人に想像させること」を共通して挙げていた点である。この傾向は、生徒たちの意識が、作品の単なる技術的な完成度を求める段階から、自己の表現を客観視し、鑑賞者とのコミュニケーションを成立させようとする主体的で対話的な段階へ変容としていることを示している。これは、美術が自己表現であると同時に、他者や社会との関わりの中で意味を生み出す文化活動であるという本質的な理解につながる。

オ 今後に向けて

本研究は、「指導と評価の一体化」を実現するために題材の学びの軸となる「言葉」を要素に分類、選定し、生徒と教師が視点を共有する取組が、写真のような分野においても学習効果を高められる可能性を示唆している。

ただし、各学校が置かれている教育環境や学習の実態を踏まえ、それぞれの状況に応じた「言葉」の選定、取り入れ方が課題である。また、作品や鑑賞の中で造形的な視点の理解をどのような手立てで見取ることが的確であるかについても同様である。より効果的な展開につなげるためには、設問や活用場面の設定の工夫について精査する必要があると考える。

今後は、「造形的な視点を評価の中にどのように取り込むか」を明確にすることと、指導と評価の一体化をより一層意識し、生徒が「何を学ぶか・何を身に付けるか」を丁寧に見直し、「言葉」の活用がより有効になるよう、引き続き研究を充実させたい。

3 「造形的な要素に注目させる『言葉』を考える授業構想シート」の活用例

(1) 相模原弥栄高等学校(全日制)

ア 科目名：「専門実技 I 油彩画」(美術科 1 年次)

イ 題材名：自画像油彩

ウ 生徒に身に付けさせたい力

自画像の自身の主題や造形的テーマについて、適切な表現技法(下地や技法用具)を活用できる力

エ 造形的な要素に着目させる「言葉」を考える授業構想シート

場面 要素を 伝える言葉		導入・説明	制作	鑑賞		振り返り
				作品鑑賞 制作(前)中間(後)	相互鑑賞 制作(前)中間(後)	
① 用具や 技法	下地の作り方 筆以外の描画用具の使い方	様々な技法を実験的に使う	様々な作家作品鑑賞(毎時間 2~3 名ほど) 藤田剛治、ワイエスなど油彩に限らず十数名	技法や用具の経験の共有		
② 造形的なテーマ	構図・光・色彩・形・質感など	主題を表現するために特に大切にしたい造形要素を考える	様々な作家作品鑑賞	主題を伝えるための造形要素を自分なりに選択し、表現できたか分析		
③ 主題、感情的なテーマ	自画像の主題(表現したいこと)	主題を基に技法や造形要素を選択していく過程を体験する	様々な作家作品鑑賞			
生徒が働かせる主な視点	一般論・題材に関する知識(制作方法・作家の言葉等)	制作者としての見方	作家の意図 鑑賞者としての見方	制作者・鑑賞者としての見方		総合的な見方

造形的な要素に着目させる「言葉」を考える授業構想シート

※作品鑑賞に関しては制作前・中間・後と適宜列を増やして下さい。
※適宜行も増やしてください。

目指す生徒像:美術科の生徒は、美術系大学進学も目指すモチベーションが高い生徒が所属する。1 年生ではそれぞれの専門実技の基本の技法を学び、制作の幅を広げるための手がかりを知り、論理的思考力、批判的思考力、表現力及び創造力を身に付ける時間にしたい。

題材の目標:1 枚目は静物画で油絵の具の扱い方など基本的な技法を知る。今回は油彩 2 枚目の自画像。モデリングペーストやジェッソなどの下地の研究、描画をするための筆以外の技法用具の研究を行いながら、独自の主題を造形的テーマを持って取り組む。

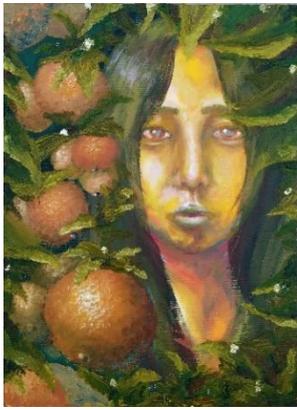
図 8 造形的な要素に注目させる「言葉」を考える授業構想シート

オ 題材の概要

本題材では、油彩による自画像制作を行った。油彩画の制作は、生徒にとって入学後2回目となる。1枚目の静物画では、油絵の具の扱い方や基本的な技法を学ぶことを目標とした。一方、2枚目の自画像制作では、モデリングペーストやジェッソといった下地の研究や、描画に使用する筆以外の技法用具（スポンジ・スキージー・ローラーなど）の研究を行った。また、図8に示したように「感情的なテーマ」や「造形的なテーマ」（色彩・光・形・質感・色彩・構図・マチエール）について作家作品の鑑賞とワークシートへの記述による言語化を行い、自分の作品へのアプローチ方法を深める時間を設けた。

完成後には相互鑑賞を実施し、試した技法の解説やその効果について、さらに自身のテーマとの関連性が有効であったかを自己分析して発表した。加えて、お互いの作品を分析し合い、批評し合う活動を通して、生徒は技法やテーマへの理解をさらに深めることができた。特に「感情のテーマ」と「造形的なテーマ」を意識し主題を生成、表現している生徒作品と、生徒の振り返りと発言、教師の見取りを表5にまとめる。なお、下線は生徒が造形的な視点を言語化している個所である。

表5 「感情のテーマ」と「造形的なテーマ」を意識し主題を生成、表現した生徒作品

生徒作品	 <p style="text-align: center;">生徒㊦の作品</p>	 <p style="text-align: center;">生徒㊧の作品</p>	 <p style="text-align: center;">生徒㊨の作品</p>
感情的なテーマ (生徒記述)	<p>期待と不安を表現した。 手で囲むクラゲに光源を作ることで、 <u>内に抱える期待をぼんやり眺めている感じを表現した。</u>その後ろには渦巻く不安をタコで表現した。</p>	<p>様々な環境の変化に触れながら、綺麗な花で自分を誤魔化し、感情をなくして現実を見つめる様子表現した。</p>	<p>「無」というものをテーマにした。ぼーっとして、昨日あったこと、今自分が何をしているかも全部忘れて考えていない状態。</p>
造形的なテーマ (生徒の発言と教師の見取り)	<p>期待を表すクラゲの明度を一番高く、中央手前に配置することでクラゲ対自分の関係性に注目させるように表現している。また、クラゲを囲む手の反射光の表現に彩度の高い暖色を選択していること、マチエールの盛り上げによって、鑑賞者はクラゲとそれを囲む両手が手前に飛び出て感じるように工夫されている。色彩遠近法や空気遠近法をいかして、背景や遠くのタコの脚は明度や彩度を低く、寒色で表現し、奥行きを感じさせることで、不安を表していると思われる。タコの脚によってはすぐ自分まで迫っているように表現するために、色相、彩度、明度を人物の表現と同等にすることや重畳遠近法を用いている。</p>	<p>作者は「持ち込んだ紙などをカラーージュすることで、複雑に重なる現実世界を表現している」と述べている。カラーージュの上から形や色や奥行きを認識できる最低限の描写が入ることで、環境によって自分を誤魔化したり、感情を無くすということを鑑賞者に示唆する表現に繋がっている。また、カラーージュの重なりや余白によって奥行きも生まれている。花の色を進出色にし、背景に対して補色に近い色を選択していること、また、人物の肌や衣服、花の反射光の色とタッチの工夫などによって、背景のエメラルドグリーンに中央の人物が溶け込みつつも、確かに存在している事が説得力ある描写で表現されている。その結果、異質なカラーージュが生きる作品となっている。</p>	<p>作者は「暖色系でミカンを描くことで明るい穏やかな未来を見つめていることを表している。頭を整理し休んでいる日常のイメージ。自分の髪の毛や肌の色もミカンと同じようにして、お日様に当たって一日を無になって過ごしている。」と述べている。 左下の大きなミカンの丹念な描写、色味や彩度の調整、立体感や質感、ミカンの角度や向き(動勢)により、手前に飛び出て感じられる。それが、この絵のアイキャッチとなっており、これにより奥の人物の表情へと視線誘導が自然に行われる構図となっている。 人物の髪や肌、ミカンや葉の色使いも、混色によって、暖色に寄った色に統一され、作者の「ミカンと同じようにお日様に当たって」という状況を表すために工夫されている。</p>

カ 実践の評価と今後に向けて

表5より、生徒が造形的な要素への理解を深め、それを用いて表現していることが見取れる。

作成した授業構想シート(図8)により、同教科を受け持つ教員が複数いる中で、題材の導入から振り返りまで、統一された指導を行いやすくなった。

各題材について明確な目標を、言葉を使って表現することで、題材を捉えて個々の考え方や技術取得の達成度を自分で確認できるようになった。また、生徒同士の相互鑑賞を通して、一人では気が付かなかった視点や技術面を共有し、自身の次の制作につなげる学びとなった。また、表5の生徒はその後の

課題においても、この題材で学んだ作家の技法を研究して制作にいかしたり、油絵の画材や素材、表現方法をいかして映像制作を行ったりして制作の幅を広げている。

(2) 横浜明朋高等学校(定時制)

ア 科目名：「美術Ⅰ」(実施時期：6～10月)

イ 題材名：色彩構成—季節を色で表現する—「A表現」(2)、「B鑑賞」(1) ア(イ)

ウ 生徒に身に付けさせたい力

学んだことを実践する力。マナーやルールを守る力。他者を認めるとともに、自己を理解する力。自己を肯定する力。

エ 造形的な要素に着目させる「言葉」を考える授業構想シート

場面 要素を 伝える言葉		導入・説明	制作	鑑賞			振り返り
				作品鑑賞 制作(前・中間・後)	相互鑑賞 制作(前・中間・後)	相互鑑賞 制作(前・中間・後)	
① 色彩	色の仕組み/ 混色/ベタ塗り	色相環/明 度/彩度	混色/ 水と絵の具の分 量	有彩色/無 彩色/明度/ 彩度	暖色系/寒色 系/中間色系	色の仕組み/混色/ベタ塗り	
② 構成	形から受ける 表現の違い	画面分割	具象表現と抽象 表現	画面構成	かたい/やわ らかい	形から受ける表現の違い	
③ 着彩	抽象表現/混 色/ベタ塗り/ 色の効果	混色/ベタ 塗り	抽象表現/ベタ 塗り/色の効果	混色/ベタ 塗り	色の効果/形 から受ける表 現の違い	抽象表現/ベタ塗り/色の効果/形 から受ける表現の違い	
生徒が働かせる主な 視点	一般論・題材に関する 知識 (制作方法・作家の言 葉等)	制作者として の見方	作家の意図 鑑賞者としての見方	制作者・鑑賞者としての見方		総合的な見方	

目指す生徒像：自己肯定感を持ち、他者と協働し社会生活実践力を身に付ける

題材の目標：学んだことを実践する力を身に付ける。他者を認め、自己理解につなげる。

※作品鑑賞に関しては制作前・中間・後と適宜列を増やして下さい。
※適宜行も増やして下さい。

図9 造形的な要素に注目させる「言葉」を考える授業構想シート

オ 題材の概要

中学美術における学習の基礎及び復習を目標とし活動を展開する。色の仕組みや形から受ける印象の違い、絵具の扱いや塗り方の説明を踏まえて作品制作に取り組む(図9)。生徒は、各自の好きな季節をテーマとして設定し、色と形の表現効果を意識して制作した。授業を通し、造形的な見方・考え方を働かせ美的経験を重ね、生活や社会の中の美術や美術文化と幅広く関わる資質・能力を育成する。また、目的・機能・美しさなどを自ら考え、主題を生成する力を身に付けさせることで主体的な活動につなげた。

以下は、生徒の振り返りより一部抜粋したものである。また、下線は造形的な要素に注目させる「言葉」を考える授業構想シートにおいて意識して使用した言葉である。造形的な要素について実感は、図10～13より見取れるが、それを言葉によって表現するまで至った生徒(下線)は一握りであった。

- ・色相環というものを知って、色のイメージで表現できることが知れて楽しかった。
- ・色彩を覚えるのが大変だったけれど、色をどのように表現するのかを工夫してオリジナルのデザインをつくれて面白かった。
- ・いままで本当に絵具(筆)が苦手だったけれど使えるようになりました。自分の技術がワンランク上のものにできて良かったです。
- ・みんなの作品を見る時間で色々と学ぶことができました。

- ・季節を色で表すためにいろいろと考えるのが難しかったけれど全力でできたと思う。
- ・友達とアイデアを出し合いながらできたのが楽しかった。
- ・体験したことのないことを体験できて面白かった。
- ・中学の時のにおいがしてなつかしかった。
- ・自分にこんな集中力があったことに驚いた



図10 生徒㉔の作品



図11 生徒㉕の作品



図12 生徒㉖の作品



図13 生徒㉗の作品

カ 課題と今後に向けて

造形的な要素に着目させる「言葉」を考える授業構想シートを使用し、「言葉」による造形的な見方・考え方の涵養を目指した。しかし、日本語の指示が難しい生徒や授業参加が困難な生徒への支援にはつながりにくい側面があるため、個々の生徒への丁寧な支援を優先する必要がある。例えば、生徒が見通しを持って計画を立てられるようにするため、より適切な言葉を選定し、視覚的要素を活用した指導を工夫することが挙げられる。また、用具の管理や扱い方、作業時の安全管理を徹底すること、教室内の掲示物（指示）の内容を精査し、教室整備を行うことで、授業に対する生徒の姿勢を育てることも重要である。

また、生徒が造形的なよさや美しさを感じ取り、作者の心情や意図、創造的な表現の工夫について考え、見方や感じ方を深められるよう、指導において使用する言葉や視覚的教材を工夫する必要がある。今後も、「指導と評価の一体化」の実現に向け、題材の学びの軸となる造形的な視点とそれを支える言葉を整理・活用していきたい。そして、生徒が制作や鑑賞の過程において造形的な見方・考え方を言葉と結び付けて働かせ、主題や表現の意図を、根拠をもって捉え、主体的に学習を深めていく姿へと変容できるにはどうしたらよいのか、より一層授業改善を進めていきたい。